火の河のほとりで

津島佑子

火の河のほとりで

津島佑子

講談社

火の河のほとりで
一九八三年十月二十五日　第一刷発行
著者——津島佑子
© Yūko Tsushima 1983, Printed in Japan

発行者——加藤勝久
発行所——株式会社講談社
東京都文京区音羽二—三—二　郵便番号一二三　電話東京(三九四五)一二一一(大代表)
印刷所——豊国印刷株式会社　製本所——株式会社黒岩光大堂
定価——一二〇〇円
落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-06-200795-9(0)　(文1)

火の河のほとりで

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

＊＊＊

夕方、門の木戸を開けると、西陽に正面から襲われた。妙法寺の大きな屋根が、路地の向こう側に見えた。鴉が止まっていることも多い、その黒々とした屋根のために、一層、西の空が眩しく眼に映った。

くの字に折れ曲がった袋小路のいちばん奥に、家はあった。右手は妙法寺の地所、入り口の左手の角がラーメン屋で、袋小路の曲がったところまで行くと、表の通りを架線から火花を散らしながら行き交う都電の大きな黄緑色の車体が見えた。そこまで出ればまた、左手から交差点の商店街を輝かせている西陽に出会った。朝は、反対側の、だらだら下りていく坂道を照らしている朝の光を見ることができた。朝の光は白く、夕方の光はいやな色を帯びていた。小学生の百合は、夕方、母親に買物を言いつけられるたびに、唇を曲げて行き渋り、それでも無理矢理、自分を家の外に出そうとする母親を恨んだ。西陽でぎらぎら光りだす玄関のガラス戸は、なにか気味の悪い生き物を感じさせた。幾つになっても、西陽は苦手なままだった。

百合がその家に越してきたのは、二歳の時だった。そこで二歳の百合が真先に憶えたものが、夕方の光だったのかもしれない。母親にそんなことは改めて聞いてみたこともなかったが、百合は自分で、そう決めこんでいた。路地に出てみたくて、誰かに門の木戸を開けてもらったら、西陽をまともに正面から浴びてしまい、泣きだしたことがあったのではないか。それに、妙法寺の屋根の影は、幼ない子どもを怯えさせるには充分な大きさのはずだった。

もちろん、百合にはその時分の記憶はなかった。百合が生まれたのは、父親が当時、勤めていた静岡の海辺の町にある中学の教員住宅で、三歳違いの姉もそこで生まれたとのことだったが、それも百合には関わりのないことだった。若い頃、片方の肺を手術で失っていた父親が、戦争の間、疎開するついでに選んだだけの赴任地で、その頃の写真も残っていなければ、両親がなつかしんで、そこでの生活を子どもたち相手に語るということもなかった。百合にとっては、自分が東京という都会で生まれたのではなかったことが、自分ではそのようにしか思えないだけに、少し残念な気がするだけだった。戦争はとっくに終わってしまっていたのだから、さっさと東京に帰ってくればよさそうなものだったのに、といかにも、どんな場合でも不器用にしか動けそうにない父親を不満に感じていた時期もあった。

父親はそれでも、なんとか妻子を引き連れて東京に戻ることができた。戦災で家を焼かれてしまった以前の土地を売り、庭のある古い家を手に入れた。袋小路のいちばん奥にある家で、向かい側は墓地、突き当たりは広い空地だった。都心に近い場所なのに、そこだけは空気が淀んでいるように静かだった。人づきあいの嫌いな父親が選びそうな家には違いなかった。父親の新しい勤務先となった高校も、そこから都電で十五分という距離にあった。

袋小路の突き当たりに、針金だけの境界線で拡がっていた空地に最初のアパートが建った

のは、それから七、八年後のことだった。父親はその時すでに、また勤務先を変えていて、家族と離れ、北の方にある、大きな川の河口を中心に抱いた港町に住みついていた。小学生の百合は、空地に建ったアパートの真新しいモルタル壁を見ては、心を弾ませていた。それは鮮やかなクリーム色だった。二年後には、妙法寺寄りのところに、もう一軒、全く同じ外観のアパートが建った。そして、さまざまな見慣れない人たちが、ひとつひとつの窓のなかで生活をはじめた。母親は庭のすぐ裏手にアパートが建ってしまったのを嘆いていたが、次第に、クリーム色の壁が色褪せていくのと歩調を合わせて、アパートを嘆くことも忘れていった。

袋小路といっても、アパートが建つ前は、突き当たりの空地を横切って、他の道に出ることもできたのだが、空地の整地がはじまるのと同時に、それまでの針金もブロック塀に変えられてしまい、袋小路は本当の袋小路になってしまったのだった。その時の戸惑いも、百合は憶えていた。母親に言われて、毎週書いていた父親への手紙にも、歯医者さんがとても遠くなってしまいました、お豆腐を買いに行くのも、本屋さんに行くのも遠くなりました、お庭の木に登らなければ、なにも見えなくなってしまいました、一度、お姉さんとお庭の木から塀を越えて、本屋さんに行こうとしたら、アパートから出てきた人におこられたことがありました、こんなことを書いた覚えもあった。その時もなぜ、以前から同じ場所になじんでいる自分たちが叱られなければならないのか、納得できずにいた。しかし、叱られるのはいやだったので、それからはコンクリート塀を越えてアパートの領分に踏みこむことはしなくなり、いつの間にか、百合も古い地図を忘れていき、何年も経ってからふと、古い地図を思い出す時があると、あんなところを通り抜けて行ったこともあったのか、とかえって不思議

な気持がした。不思議と言えば、なにもかもが、不思議なことに思えるのだった。表の道に都電が走っていたことも、その都電に乗って学校に通っていたことも、姉と手をつないで坂道を駆け下り、本屋に雑誌を買いに行っていたことも、父親が家にいたことがあったということも、家に庭があり、小さな池まであって、夏はそこで姉と水浴びをしたことも、ミミと名づけていた白い犬が庭先で吠えていたことも、そのミミが死んだ時、姉が庭に穴を掘りながら涙を流していたことも……。

父親に手紙を書き送っていたのは、一体、何歳になるまでのことだったのだろう。少なくとも、中学生になるまでは書き続けていた。父親から返事をもらったことは、あまりなかった。たまにもらっても、子どもがうれしく思うにはあまりにも素気ない文面が絵葉書にあるだけだった。それでも花や山の写真の絵葉書はまとめてしまっておいたのだが、どこに紛れこんでしまったのか、思い出して探しはじめた時には、もう見つけることはできなくなっていた。父親が死ぬと分かっていたら、もっと大切にしていたのに、とさすがにその時は落胆した。父親が百合に残してくれたものは、あまりにも少なかった。大学生になったばかりの百合は、父親が大事にしていたという鹿の角と中国のものらしい大きな硯、それに一輪差しにも使えそうな銅製の水滴を、父親の死んだあとに分けてもらった。硯と水滴はまだしも、鹿の角はしまっておくのにも場所を取り、気色も悪く、迷惑にさえ思っていたのだが、結婚した相手が気に入って、それではじめて、部屋の壁に取り付けることになった。もともと、こんな風に使われていたはずなんだから、と夫はそこを自分のコートやショルダー・バッグを掛ける場所にしてしまった。

父親がどんな人物だったのか、夫に聞かれても、百合には答えることができなかった。生

物の教師だった。家でも机にばかり向かっていたので、勉強家ではあったのだろうが、生徒に慕われるような教師ではなかった。生徒が家に遊びに来ることもなかったし、そもそも自分のまわりの人間には一切興味がない様子だった。百合たち姉妹を連れて外出することもなかった代りに、怒鳴りつけたり、説教することもなかった。旅行にも時折り、一人で出ていたようだが、おみやげが期待できるわけでもないので、父親の不在を気にかけたこともなかった。どんな旅行だったのか、女が同行していたのか、と百合は結婚してから疑ってみたこともあったが、そんなことは百合にとって想像外のことで、おそらく父親はいつも一人きりで、さまざまな山野を歩きまわり、植物を採集したり、小石を拾い集めたりしていたのだろう、と思うほかなかった。

両親は仲の良い夫婦ではなかった、とも夫と暮すようになってから百合ははじめて思い当たった。父親が一人離れて暮し続けていたのも、自然なことではなかったのかもしれないし、母親が子どもたちを連れてそこを訪ねて行くことがなかったのも、普通に考えればおかしいことだった。父親は夏休み、正月、と時々、姿を現わしては、すぐに立ち去って行った。しかし、小学生の百合は眼の前で両親が口げんかをはじめたり、自分の生活が変わったりするのではない限り、両親を当然、そうあるべきものとして受けとめていた。母親はいつでもそばにいてくれたし、父親は母子の生活を経済的に、世間的に守っていてくれた。それで、充分なのだった。

しかし、三歳年上の姉には百合と違う思いがあったのだろうか。別の思いを持たずにいられないようなことを知っていたのだろうか。

中学校を終えると、姉は父親のもとに一人で遊びに行き、そのまま帰ってこなくなった。

母親は百合を連れて、姉に会いに行った。しかし、姉を連れ戻すことはできなかった。百合は、その時はじめて父親の住まいを見たのだが、その時が父親と会った最後でもあった。市の教員住宅だという、二間しかない小さな家に、父親は住みついていた。鹿の角が部屋のいちばん目立つところに飾ってあった。箱がたくさん積んであり、それは植物や小石の標本だった。百合が忘れかけていた父親のにおいがこもっていた。こんな居心地の悪そうなところで、姉はよく我慢できるものだ、と百合はなんとなくおとなっぽくなったように見える姉の顔を感心して眺めていた。姉は父親に似て体も口も大きく、少女というよりは少年のようだった。それも痩せっぽちの、色の黒い少年だった。が、父親と並んで坐っていた姉は、もう少年とは似ていなかった。久し振りに会った父親と姉だったのに、百合はその二人に自分から近づくことはできなかった。

百合は母親のもとで、特別、淋しい思いも持たずに、中学生になり、高校生になった。父親と姉は、学校が休みの時も帰ってはこなかった。母親は庭をつぶして、アパートを建てた。街からは都電が消え、代りに、バスが走るようになった。商店街に、ビルが建ち並んだ。角のラーメン屋がなくなり、夜はバーになる喫茶店ができた。隣りの家も、アパートに変わった。街の名前までが、聞き慣れないものに変えられてしまった。

姉は高校を出てから、大学にもどこにも行かなかった。父親の手伝いをするだけの日々だったのかどうか、百合には分からない。田舎にいれば、そんなことになるのも仕方がない、と自分の姉が決して自慢することのできない姉になってしまったのをうとましくさえ感じていた。暇つぶしに料理学校に通いだした母親の作ってくれる御馳走を食べながら、百合は勉強を続け、希望通りの私立大学に合格した。父親にも手紙で知らせた。父親と姉の連名で、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

お祝いに図書券を送ってくれた。入学式の日まで、百合は新しい洋服を買ってもらったり、美容院に行って生まれてはじめてパーマをかけたりして、慌しい気持で過ごしていた。入学式には、母親も共に行った。そして五月になり、父親が死んだ。姉が電話でそのように知らせてきた。いつものように山歩きをしていて、沢で足を辷らせて岩に頭を打ち砕いたということだった。いつかはそんな死に方をすると思っていた、とも姉は言った。母親がまず、一人で姉のもとに行った。母親から電話があったら、百合も駆けつけることになっていた。一日経ち、二日経っても、電話はなかった。百合の方から、姉のところに電話をかけてみた。母親が電話口に出て来た。父親の葬式はこちらで済ませることになったから、百合はわざわざ出てくるには及ばない、家に帰ってからもどうせまた、同じようなことをしなければならないのだし、と母親は言った。

一週間経って、母親は父親の骨壺を持って帰ってきた。疲れきった様子だった。百合はその母親に不満をぶつけた。わたしだって、一緒に向こうに行って、お父さんの死顔を見ておきたかったし、お姉さんにだって会いたかった。

母親は百合に、かなりためらった挙句、姉が妊娠していたのだ、と告げ、力が抜けてしまったように泣きだした。姉は二十一歳だった。考えてみれば、そういうことになってもおかしくない年齢ではあった。しかし、相手の名前を姉は誰にも言えなかった。母親は、どういうことを考えているのか分からない姉を、すぐさま病院に連れて行った。妊娠七ヵ月になっていたが、無理に人工早産の処置をしてもらった。姉は気味の悪いほど、母親におとなしく従った。母親はその間に、一人で父親の通夜と告別式を簡単に済ませてしまった。父親なんて、そばにいたってなんにも気づいてやれないんだから、と母親は骨壺に向かって呟いてい

た。

母親はそれから何度も、姉をこちらに連れ戻すために、姉のもとに通った。しかし、姉は帰ってこなかった。三ヵ月経った頃、姉は父親と住んでいた教員住宅を出て、市の郊外に物置小屋のような家を借りた。働き口も父親の関係で幾つか頼れそうなところがあるから、心配することはない、と姉は言い張った。狭い土地のことで、姉のことを知っている人は多く、その上、我慢ならない、愚劣なうわさまでが拡がっていた。そんなうわさのなかになぜ、わざわざ身を置かなければならないのか、東京に帰ってしまえば、なにもなかったことになるのに、と母親は歯ぎしりしていたが、二十一歳になった娘を、今更、どうすることもできなかった。姉に会いに行けば、同じうわさのなかに閉じこめられてしまうことになるから、と百合がその土地に行くことに、母親は反対した。そう言われなくても、百合には姉に会いたい気持は起こらなかった。姉に近づくことは、自分まで姉のようになってしまうことになる気がして、こわかった。百合はどんな未来でも自分に期待できる、まだ十八歳の大学生だった。姉とは違う。それをはっきりさせておきたかった。

無論、姉を取り巻いているというわさを、百合は信じたことがなかった。しかし、そのうわさの力は怖れていた。うわさのなかで平然としている姉までが、次第に、正体の分からない、胡散くさいもののように思えてきた。はっきりしない思いではあった。姉を嫌い、忘れようと考えていたわけではなかった。ちょうど、あの西陽のように、姉のことを思い出すと、漠然と、恐怖に似た気持が体をよぎるのだった。うわさがどんなものだったか、忘れたいと思い、忘れたとも思っているのに、百合にはそのうわさと姉を切り離して考えることはできなくなっていた。そして、姉と共にうわさを背負っている父親も、百合にとってなつか

しく思い出せる存在ではなくなってしまった。父親についても、姉についても、百合は関心を持たなくなった。その二人を知っている母親にも、背を向けてしまった。百合は地味ではあるが、それなりに魅力はある女子学生になっていた。男子学生とつきあうのは、なんと言っても楽しいことだった。グループで、ハイキングや海水浴にも行った。一年生の冬に、ある青年と大学の購買部で出会った。その四年生の青年は百合と小学校が同じだった。青年の方が百合の顔を見憶えていてくれた。百合に姉がいたことも憶えていた。姉妹がそろって読書感想文で賞をもらったことがあり、それで青年の記憶にも残っていたようだった。青年は体が大きく、姉妹と同様に、学級委員もよくしていた少年だったのだが、その頃の印象とあまり変わっていなかった。色がすっかり黒くなっていたのが、違っていた。それを言うと、青年はただ笑っていた。百合もなんとなく、顔を赤くした。青年は大学を出ると、ある土地開発会社の研究所に入った。三年後に、百合と結婚し、百合の家に来た。青年の父親は再婚していて、義母と年の離れた妹、弟がいるので、百合の家に来るのは、むしろ青年の望んでいたことだった。百合の母親も喜んで、青年を迎えた。結婚式は学士会館で内輪にした。百合は迷った末、姉にも招待状を送ったが、姉は来なかった。来ない方がよかったのだ、と内心胸を撫でおろしていた。姉は一ヵ月ほど経ってから、結婚祝いとして、その地方の民芸品だという、小さな整理ダンスを送って寄越した。姉はその頃、一人暮らしではなくなっていた。母親が言うには、その相手には子どもも奥さんもいるらしい、ということだった。百合は姉についてどんな話を聞かされても、もう意外とは思わなくなっていた。夫にも姉のことは言わないままでいた。その点では、母と気持が通い合っていた。姉が送ってきてくれた整理ダンスは、母の部屋の方に似合うので、母の部屋に置くことにした。

やがて、百合は男の子を産んだ。丈夫な赤ん坊だった。赤ん坊がふと笑う顔に、百合は姉を思い出させられた。死んだ人を思い出すように、姉と自分が子どもだった頃をなつかしむようになった。夫は百合の望み通りの父親役を果たしてくれた。赤ん坊を風呂に入れてくれたし、よく膝の上であやしてもくれた。赤ん坊が少し大きくなると、面倒がらずに散歩にも連れだしてくれた。

百合は自分の息子の幸せを願う母親になっていた。息子のほかに子どもは欲しくない、と思った。母親はせめてもう一人、と言っていたが、百合は知らん振りを決めこんだ。夫も、百合がそれでよいのなら、子どもは一人で充分、と言ってくれた。兄弟というものが子どもにとって、それほどよいものなのだろうか、という思いが夫にも百合にもあった。

息子が四歳になった時、夫は突然、それまでの会社を辞め、仲間うちで事務所を開いた。仕事の内容は、今までとたいして違わないようだった。しかし、出張は多くなった。袋小路の家も、充分に古びたものになってしまった。ところどころを改築したり、玄関のガラス戸を洋式のドアに換えたりしてきたが、いよいよ建て直さなければならない時期が来たようだった。夫が家のことは自分が口を出すことではないから、と言うので、少しは相談に乗ってくれても良さそうなものなのに、と不満に思いながら、百合は母親と話し合って、家もアパートも思いきって一緒に取りこわしてしまい、三階建てのビルを建て、二階と一階の部分は誰かに買ってもらうことにした。しかし、そうするには姉の了解が必要だ、と母親が言いだした。百合は仕方なく、姉に手紙を書いた。転居先不明、ということで、その手紙は戻ってきてしまった。それでも母親は、このことばかりは事後承諾というわけにはいかない、と言い続けた。その頃ちょうど、夫が姉のいる地方の仕事を請け負っていて、そこに始終、出張

もしていたので、市役所に寄って、姉の行方を探すことを頼みこんだ。
夫はすぐに、姉を探しだしてくれた。どういう関係なのか、十五歳の少女と二人で市営アパートに入っていたということだった。百合は、さしさわりのない立場の夫から家の話を姉に切りだしてもらった。百合が思っていたように、家のことは姉には関心のない話のようだった。どうにでもしてくれ、ということだったらしいが、姉の生活を見てきた夫が、そうもいかないだろう、と言いだした。姉は山から採ってきた薬草を育てたり、アケビの蔓で籠を編んだり、時々呼ばれて、田舎料理の店を手伝ったりするだけで、なんの定職も持っていないのだ、と夫は不機嫌な顔で説明した。
いろいろ考えた末、マンションとして売れた金額の一部をまず姉に渡し、それから母親が死ねば、母親の名義になっていた分を姉に譲り渡す、ということにした。その際、面倒がなく売り払えるように、と母親の住む部分を独立した部屋にした。夫を通じて、姉もそれで了解してくれた。
百合は新しい自分の住まいの設計に熱中した。今までうらやましくてならなかった明るい、西洋風の住まいにしたかった。そして玄関は、決して西に向けたくなかった。嫌いなものは嫌いなんだから、と西陽をできるだけ避けた住まいにした。玄関は北側に向け、窓も西側にはつけなかった。
息子が小学生になった年に、ビルはようやく完成した。二階はすぐに売れたが、なかなか買い手がつかなかった一階も半年後にはようやく売れた。手もとに残った金額は思っていたよりもずっと少なかったが、約束通り、そこからとりあえずのお金も、姉に送った。人に自慢せずにいられないような日々だった。夫の出張が相変わらず多いのと、仕事で疲れてしま

うのか、息子が話しかけてもぼんやりしているようになったのが、多少、百合をつまらない気持にさせるだけだった。しかし、それも気にかけなければならないことではないはずだった。

大きくなった息子の顔に、百合は姉の面影を見続けていた。姉に似ているということは、百合の父親にも似ているということだった。しかし、母親にはそうは見えないようだった。夫に似て、なかなか賢そうな子どもだ、と言った。そう言われれば、夫にそっくりだとも思えた。夫は、なんとも言わないままでいたのだが、ある日、驚いた顔をして、息子は百合の姉に顔が似ている、と言いだした。そうなのよ、今まであなたに言わなかったけど、この子の顔ってどことなく、あの人に似ているの、と百合は夫の発見を面白がりはしたが、やっぱり、夫が見てもそうなのか、とひんやりした気持にもなった。夫はすぐにそのことにも関心を失ってしまったようで、その後も同じことを繰り返して言うことはなかった。

今、百合の知らないところで生きている姉になにかの思いを抱くには、百合の気持はあまりにも遠いものになってしまっていた。死んだ父親と肩を並べて、子どもの頃の姉がぼんやりと思い出されるだけだった。それは、自分の子ども時代を思い出すことでもあった。姉と遊んだこともあった子ども時代。空地がたくさんあり、自動車を見かけることがまだ珍しくて、表の通りで自動車を見るたびに騒ぎたてていた古い時代。掘りごたつと火鉢しかなかった寒い時代。あの頃、一体どんなものを食べ、どんなことを感じて生きていたのだったろう。

百合は姉の夢も、たまに見た。夢のなかの姉はいつも、中学三年生だった。一方の百合は今の自分だったり、夫とつきあっていた頃の自分だったりした。姉が、自分と母のもとから

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com